



TITLE:

(随想)腎盂腎炎偶感

AUTHOR(S):

岩田, 正三

---

CITATION:

岩田, 正三. (随想)腎盂腎炎偶感. 泌尿器科紀要 1965, 11(6): 433-434

ISSUE DATE:

1965-06

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/112768>

RIGHT:

## 泌 尿 器 科 紀 要

第 11 巻 第 6 号

昭和 40 年 6 月

## 随 想

## 腎 盂 腎 炎 偶 感

国立東京第二病院 岩 田 正 三

気軽な堅苦しくない文章を巻頭にというのが本誌からの御話しであるが、医学雑誌ということを見ると医学と無関係なことの随想では変ではないかと考えられるし、さりとて医学のこととなればどうしても堅苦しくない様にとの主旨に反する結果とも成り兼ねないので何がしたものかと考えたが、本来無趣味の小生には余り他のことで雑誌上にお目にかける程のことも書けないので、医学のことではあるが論文とか学会発表の出来そうでない誠に幼稚なことで御許しを御願ひしたいと思う。世の中にどうもはつきりしない事というのは多いことであるし、医学の内でも相手が人間という誠に扱い難いものである故か、はつきりしない事は山程ある。しかしはつきりしないという此処での意味は何んだか割り切れない不合理の様な気のすることで、それが自分に関係が深いことほど常に気にかかるものである。というのは近年特に問題となり脚光を浴びて来た疾患に腎盂腎炎なるものがある。そして問題にされているのは中でも慢性腎盂腎炎で、この疾患そのものも臨床上特徴ある症状がつかみ難いといわれ、はつきりしない疾患であるが、私のいう割り切れない不合理なこととはこの疾患自体のことではなく、これと腎盂炎との関係についてである。腎盂腎炎が問題視され種々研究上に浮んで来たのは比較的最近であり、内科系の方面よりいわれて来ている様で、診断しにくい、治療しにくい、しいては、高血圧、萎縮腎、尿毒症などと内科方面に関係深い方面に発展しかねないことから問題とされているであろうが、泌尿器科でもこれにつられてではないかも知れないが注目研究されて来ている。

さて、一方腎盂炎であるが、この疾患は我々学生時代より耳にしている疾患であり日常お目にかかっているもので、悪感戦慄と共に高熱、細菌を含む膿尿の症状は成書の通りで腎盂炎なる診断は日常下している次第である。私がわからないというのは腎盂腎炎も尿路の感染症（この場合細菌性のみに限定させて戴く）であり、腎盂炎と腎盂腎炎とは同一のものであるか、別のものか、或いは関係の深いものかということである。成書によつては腎盂炎が進行すれば腎盂腎炎となると書いてもある。しからば急性腎盂炎→慢性腎盂炎→急性腎盂腎炎→慢性腎盂腎炎の順序に進むかというにこれは何か変である様に思う。腎盂炎とは腎盂の炎症であろうが、腎盂に始つた炎症がどの位の間腎盂のみに局限しているだろうか。たとえ初めは腎盂にのみあつても我々の目前に現われる時期にも局限しているであろうか、或は腎実質にも病変は波及してないであろうか。慢性腎盂炎に至つては相当長い間病変が腎盂のみに限定されているのであろうか。こう云う疑問をとくには腎盂炎の初期のものから慢性といわれるものまで各種の腎全体の病変を検査する要があろうが、実際にかかる腎を腎摘出で得る

ことは不可能に近いことであろう上は動物実験でも行つて観察せねばならないだろう。この点腎盂腎炎という字の病名の方は合理的である様で、腎盂並に腎実質の炎症であり腎盂に変化が始つたとしても次第に腎実質に波及して行くのも考えられるので、この急性、慢性は考えられることである。しかし現今一番問題視されている慢性腎盂腎炎は急性のものから進んで慢性となるのであろうか。急性の腎盂腎炎では症状も可成り明かと思われ適当な治療で十分治癒するのではないかと考えられるが、患者の治療への怠慢、不十分な治療、感染菌の抗生物質への耐性問題等で慢性化して行く外に初めから慢性化の傾向でくるのがあるのではないだろうか。あるとすればどう云う感染経路で来るであろうか。

昨今の様に腎盂腎炎が問題とされる大部前のこと、10年以上になるかどうか良く憶えてはいないが、尚それ以前より尿路感染症に或る興味を抱いていた私は医学雑誌などで腎盂腎炎なるものの研究には多少とも注意を向けていたのではあるが、The Journal of Urology などの外国文献に Pyelitis なる言葉は仲々見つからなく時々 Pyelonephritis なる言葉を見出した。文字通り訳して腎盂腎炎である。どう云う疾患であろうか、腎盂並に腎実質への感染症であろうとは考えていたが、我々の Pyelitis と云っているものの或るものがこれに該当するのではないかと途中で考える様になつたが、最近腎盂腎炎が脚光を浴びるに従つて今迄述べた様なことが疑問となつて来た。そして従来の腎盂腎炎と診断されている様な症状の患者が来た時に腎盂腎炎とつけるべきか急性腎盂腎炎とつけるべきか少なからずまよふことが多い。しかし既に教育を受けられ、余りこう云う問題に興味のない方達は腎盂腎炎と堂々と診断されるが私ははたしてこれで良いのだろうかと考えることがある。いづれにせよ腎盂腎炎、腎盂腎炎の急性、慢性のを夫々感染発症から組織の変化の様相を追及して明かとなるであろうが、私の感じでは急性腎盂腎炎と云うのは極く初期的なもので我々の所を訪れた時にはこの時期の内であらうかということ、慢性腎盂腎炎なるものははたして存在するのであらうかということが疑問として残るのである。しかし識者の内にはこんな疑問は簡単であると説明して戴ける方が居られるかも知れないので敢て幼稚な事を述べさせて戴いた次第である。

たとえ慢性腎盂腎炎が内科領域と関係深い症状、或いは結果が生ずるといつても尿路の感染症であり泌尿器科領域の疾患と考えられるので、之等疾患の研究解明は是非とも泌尿器科医の手でやり度いものである。

他科との関係、つまりグレンツゲビートのことで此の機会にもう一つ述べさせて戴くと、血尿というと直ちに泌尿器科領域のものとされる傾向がある。こんなことで廻されて来る患者に特発性腎出血の範囲に入ると思われるものがあるが、初めは肉眼的血尿も間もなく顕微鏡的血尿となり一進一退して赤血球が仲々とれないが相当の蛋白尿が長くつづくのが時にある。勿論その他の症状はないので当方としては腎炎といたく内科に返すと高血圧、浮腫等はないので泌尿器科のものとして又返されてくる。内科の成書に出血性腎炎なる記載があり、これは所謂腎炎の症状はないが、血尿が強いといわれているが長くはつづかないとしてある。我々はこれにでも入れ度い所であるが先方はそうとつてはくれない。

ここで考えられるのは内科でも消化器科、循環器科等と器官系統的に専門化していることから腎炎など内科的腎疾患も一層のこと泌尿器科に含めてはと考えられるが、泌尿器科が外科的を標榜していることと反対にもなるのでどうかとも考えられる。これに類することはほかにもあるのである。

漠然としてはつきりしなく考えていたことを此の機会に述べさせて戴いたわけである。